

ひまわり メッセージ

47号

2015.2.10

西濃園域
発達障が支援センター
ひまわり

発行人：中野たみ子

だまって、そつと

寄り添うこと



昨今、殺伐としたニュースが続く中、東京大学に忠犬ハチ公と飼主の上野教授の銅像が健つという記事を見つきました。ハチ公は毎日、上野教授の帰りを渋谷の駅で待ち、教授亡き後も通いつづけたことで知られています。渋谷駅前に建つハチ公の像は、戦時中に一度軍に没収されて戦後に再建されたものですが、今回の像は教授に甘えてとびつくハチ公と、それを受け止める教授の姿が復元されて、「や」と会えたね」と互いに喜び合っているかの様に、ほのぼのとした銅像の写真が掲載されていました。動物と人との心あたたまる話ですが、さて、私たち人間

同士はどうでしょうか。子どもと大人の関係はどうでしょうか。私は、子どもたちは大人以上に繊細な心と鋭い感性をもっていると思っています。だから、お母さんが不安になられると子どもも不安になり、担任の先生のまなざしは、そのまま子どもたちの心に影響を及ぼしていくのでしょう。「思いやりのある子に」、「心豊かなやさしい子に」という大人の願いは、私たち大人のまなざしやことばのかけ方などによつて、たやすく左右されると思っています。

前にダイバーと鯨のふれあいを書きましたが、人はことばを持つが故に、「ことばで通じ合えないと駄目だ」とどこかで思っているのではないのでしょうか。だからことばで表現することにこだわり、話すことを強要してしまいがちです。でも、私たちは、悲しい時や苦しい時に信頼できる相手が、ただただ、まごも言わずに寄り添っていてくれるだけで安らぐというのを知っているのではないのでしょうか。実はそれが人と人をつなぐ原点ではないでしょうか。ことばは嘘をつきますが、相手から受ける感じは、意外と真実に近いのです。「悪いことをしたら厳しく叱るけど、あなたの気持ちは全身で受け止めるよ」という思いを伝えられたらいいですね。

スマイルブックの

引きつぎ会

園・学校として保護者



大垣では、サポートブック(スマイルブック)の引きつぎ会が始まりました。私もその場に参加させていただいているのですが、お母さんが充分に理解されていないケースや学校への要求を一方的に言われるケース、園との関係は大丈夫かなあと心配になるケース、兄弟などの関係で明らかに学校とこじれていると感じられるケースなども中には見受けられます。

私は、ひきつぎの場は、保護者の方にとっては、自分の子の実態を再認識する場でもあってほしいと思っていきます。

園で困ったことがあった時にうまく伝えられなくても、

園の先生は、子どもの表情を見て対応して下さるかも知れませんが、学校では、そうはいきません。「分かっていただきたーい」と言うよりは、何かサインを決めてお

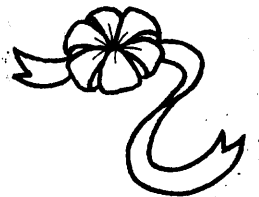
いて、その園での支援を引きついでもらうには、園の先生が「集中できずにへやから出ていくこと」もありまーす」と言われた時、「家では困っていないのに」と思っ、お母さんもうっしやるでしょう。でも、家庭の姿と集団生活での姿は、ちがって、当然です。ですから、園での姿を聞いて、自分の子にどんな困り感があるか、今まーどどんな支援をしてもらって来たのかを、理解してあげることです。

同席させていただいて、私は時々「お母さん、家庭ではゲームの時間を決めていますか」とか、「生活面でのことをもう一度チェックしながらおしてみ下さい」と、具体的に聞いてみることもあります。学校で勉強さえできればいいと考えるのではなく、どんなことに気をつけていけばいいの、特性のある子であれば、これからも自分の子の理解と対応をしていくことが大切であるという認識をもったいただきたいと願っているからです。

子どもたちの発達、成長の基盤、それは家庭にあるのです。そして、周りから支えるのは私たちの役割といえるでしょう。

通級指導教室の

実践から学ぶ



ある通級指導教室の実践を見せただけではありません。

指導にあたっては、特別支援学校の自立活動に基づいて個別の指導計画がたてられていました。

通級は週一回、一体どんなことをしているのだろうか

と思ってしまう方も多いことでしょう。今年も

通級を勧められながら、「行きません」と拒否された保護者の方がいらっしやうと聞いて、私は何と

もったいないことを……と思いました。

そして、通常学級の先生方にももっと見ていただき

たいとも思ったのです。「週一回通って何が変わるの？」

と考えておられる方や、自分には関係がないと思

っていらっしやる（？）かもしれない方に、一人一人の教

育的ニーズも考え実践することの大切さやすばら

しさを知らせてもらいたいと思っています。

通級指導教室のねらいも、「自己理解力」と「自

己解決力の育成」に重点をおき、そのためには、自

分の特性や変容を正しく理解すること、そして、そ

の特性ゆえに生じる困難の原因を追求し、自分

にできる最適な解決方法を選択することだと考

えて単元を設定されてきました。

保育園の頃には、みんなと同じようにできないことが

多くて失敗体験を積み重ね、「どうせできない。ほ

くなんてだめ」と、自己否定が強く、負けることがいや

で勝手にルールをかえてしまうAさんは、途中で泣き

出したり、やめてしまったりすることが多かったとい

ことでした。

しかし、二年間の通級指導によって、Aさんは、昔

の自分がどうであったかを確認し、今、どのように変容

してきたのかを先生と一緒に再確認したあと、「自分

で考える力をつける」というねらいに向かって挑戦しま

した。どの様に表現したら、相手に分かってもらえる

のか、ことばを選び、考え、活動にとりくみました。

活動内容は、図形ゲームで、丸や三角、四角、半円など

を使って、どの位置に、どの様に図形を置けばいいのか。相手(先生)に分かるように説明するのです。そして自分の手元の図形と同じ図形を作るように、導いていくのです。

Aさんは、この日、困った時にも涙を見せず、自分で考え、自分で表現し、「できた」という達成感をもつことができたようでした。先生は「人に助けを求めずに自分の力でできたと思えた時にこそ、学びの実感がある」として、考えることのできる十分な時間を待つこと、言葉かけを意図的になくすることなど、Aさんが力を存分に發揮できるような配慮をされていきました。

そして、最後に、振り返りをし、どこで困ったのか、そこをどの様に乗り越えたかを確認し、自分でできたこと、考えられたこと、賞賛を惜しまれませんでした。

Aさんが以前の自己否定感の強かった自分も、本当の自分の姿であることを認め、失敗も受け入れつつ変容していく姿に感動しました。そして、この通級教

室での学習は、確実に思春期のアイデンティティ(自己の存在認識)へとつながっていくのだと思っただけでした。

特殊教育から特別支援教育へという変化は、本当に大きな変化です。一人ひとりの子どもが、どこで困っているのか、理解できなければ、指導計画は立てられません。通級指導教室の先生も、特別支援学級の先生も、子ども一人ひとりの教育的ニーズをしつかりとらえて、個別の計画を立て、実践する……大変なことですが、そこには、マニュアルはありません。自分で考えていくしかありません。通常学級の先生とは違う悩みがあると思うのです。指導力も必要とされます。

お母さん方は、「授業の途中で抜けなくてはいけないから」とか、「お友だちに何か言われるとか、わいさうだ」とか言われますが、もしAさんが通常学級だけでしたら、ごしていたら、自己否定はもっと強くなり、自分で解決しようと思わず、「どうせ自分なんか……できない」という日々を送っていたのではないのでしょうか。「三年生から通級に入ります」、「六年から通います」というお子さん

んの多くは、おそろくこじれてしまったケースでしょう。子どもの心が傷つき、自分がだめなんだとマイナスの方向にはかり行ってしまっからでは、教倍の時間を要しないと、自分を自分として認めるとうろへ到達できないと思ふのです。

週一回の通級であっても、子どもたちは確実に変わっていきます。子どもたちの力を信じて、私たちは周リから支えていかなくは……と思ふのです。

この仕事をしなくて、気になることは、家庭のルールがなくなってきたこと、ゲームやスマホに依存している大人がふえたこと、子どもたちの考える力や表現力が落ちてきていると感ぜるること。

良い方向だと思えることは、お母さんたちが自分の子を理解しようとしていること、そして、先生方が、子どもたちも困っている子だと考えて下さるようになったこと、通常学級の中でも様々な工夫をして下さる先生が増えたこと、そして、様々な機関との連携が進みつつあること。

こんな言葉は言わないで！

子どもたちの立場から

お母さんにお願ひしたいこと

◎「ママは、あなたのためを思つてやつてるのよ。」

何気なく言っているけれど、反抗期になった子は、このことばに、おそろく「ママは、ぼくのためなんかじゃない。自分のためだよ。」と、反発するでしょう。

親切の押し売りはやめましょう。

◎「くできない子はママの子じゃない。」

「えっ、本当に、ぼくはママの子じゃないの。」と子どもの心は不安定になります。「もう知らない。出ていって。」等と言われ、実際に家を出た子もいます。

◎「どうしてそんなことをするの。何回言ったら分かるの。いいかげんにしなさい。」

何回聞いてもすぐに忘れちゃうの。申し訳ないけど、もう一回教えてほしい。



先生にお願いしたい禁句

① 授業に集中できない子に

「ガミガミと小言を言う。お説教する。」

② 発表が上手にできない子に

「しっかり聞いていないからでは。」

「立っていなさい。」

「もっとはっきり言いなさい。」

③ 忘れ物の多い子に

「努力が足りない。反省しなさい。」

「こんなに多いのは、あなただけよ（クラス等にして）」

④ ゴソゴソよく動く子に

「何度も名を呼んで注意する。」

「これで〇回目。何度注意したらわかるの。」

⑤ 黙って教室を出ていく子に

「コラッ」とカブくで引き戻す

「無視して授業をつづける」

「待ちなさい」と追いかける。



⑥ 体育のできない子に

「先生の言うとおりにやればできるはずよ。」

「一人でがんばって練習しなさい。」

※ 発達障がいの子どもたちは、やろうとしてもできないために困っていたり、「もうやらない」「いやだ」と投げ出したりしてしまったりするので、先生をばかにしたり、わざと反抗的な態度をとるのは、回避であったり、自己防衛だったりします。そうやってしまったのは、その子が悪いからではないのです。

信頼関係ができていないのに、叱ったり、ペナルティを与えたり、責めたりしても子どもはよくなったりかず、二次障がいへと突入していきます。でも、先生方の配慮によって、大きく成長していきます。そのためには、家庭生活の見直しと、学校との連携が不可欠なのです。

お知らせ

三月の例会は、十日九時三十分からです。スマイルブックをお持ち下さい。